



生活の流れの中で

伊集院 理子

年少、年中、年長と持ち上がりで、クラスの子どもたちと生活を共にしてきている。年長になって、「生活」と子どもたちのかかわりというテーマが、私の頭をまた占めるようになってきている。「また」と書いたのは、この子どもたちの前に担任していた子どもたちを卒園させた時に、私は「生活者としての子どもたち」という拙稿を当

誌第九十八巻第八号に書いてきたからである。その中で私は次のように書いている。「私は、自分のやりたい遊びをやりたいようにする日常生活の流れはもちろんのこと、いつもと違う日の流れにも、子どもたちが主体的に関われるように、子どもたちが見通しを持って生活を作り出していきけるようにと考えて、子どもたちに関わってき



た」「自分のやりたいことを見つけそれを実現していく生活にも、全体の生活の流れや保育者の意図する事柄に取り組む生活にも、ともに、主体的に子どもたちが関わっていくようにしなければ、

真の意味で、幼稚園生活の主体者として子どもたちを位置づけることにはならないのではないか。

そのためにも、全体の流れを作る時、こちらが意図する流れを作る時、子どもたち自身がその子ども白らの判断でその流れに沿う行動がとれるようにと考えて、子どもたちと関わってきた」。

今再びこの文を読みかえしてみると、「子どもたちが主体的に関われるように」と書きながらも、主体的に関わる姿としては、「流れに沿う行動がとれる」ということに留まっている事が分かる。

生活に主体的にかかわるとはどういうことか、その中で何を育てようとしているのか、じゃがい

も掘りから始まった一連の活動をもとに、生活の流れ、その中での子どもの姿をとらえなおしてみたいと思っている。

じゃがいも掘り

暑い暑い日に、年中、年長の親子でじゃがいも掘りに出かけた。年長の子どもたちは、親子で自分の家を持ちかえる分を掘った後、今度は子どもたちだけで、幼稚園分のじゃがいもを掘ることにした。「小さい組は、今日は幼稚園で留守番だから、このおいもを幼稚園に持って帰って、小さい組さんに食べさせてあげようね。おいもを自分たちで洗って、おばさんに茹でてもらって、幼稚園のみんなにご馳走をしてあげよう」ということを伝えて、おいもを掘りだした。自分たちの分を掘るだけで、すでに汗と土まみれになっていたが、さすが大きい組で、おいもを掘る楽しさも



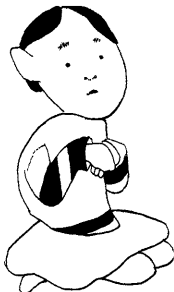
あつて、幼稚園分のおいもも力をあわせて掘り上げてくれた。

じゃがいもの選別

じゃがいも掘りの次の日、早速じゃがいも洗いをするつもりで来ている人もいた。今年のじゃがいもは、大きいものが多く、大きいものは茹でるのに時間もかかるし、一人一つは持てあましてしまうだろうと予想されたので、子どもたちが食べるのにちょうどいい大きさのものを選ぶ必要があった。そこで、その作業も子どもたちと一緒に取り組むことにした。大きいもの、中くらいのもの、ちょうどいいもの、赤ちゃんにも分けてみることにした。園庭の桜の木かげに何人かの子どもたちとダンボール箱に入ったおいもを力を合わせて運んできた。目敏い三歳の子どもたちはその様子を見つけ、「何するの」と訪ねてきた。「大き

い組さんがたくさんおいもをとってきたから、明日洗って茹でて食べようと思って、これからみんなが食べやすい大きさのおいもを探すんだ」ということを伝えた。大きさの見本となるおいもを一、二個こちらで選んで置いておくと、子どもたちは、それと比較しながらおいもを分けていった。自分で二つのおいもを両手に持って比べながらかなり厳密にやっている人もいれば、おおよっぱな人、「これは大きいよね」といちいち確認しながらやっている人、面白い形のおいもを見つけて「雪だるまみたい」と大きさより形に注目している人と様々であった。年中、年少の人も数人手伝いに来てくれた。

お帰りの時に、じゃがいもを大ききで分け





た話、「明日じゃがいを洗って、茹でて、ご馳走してあげよう」という話をクラス全体に投げかけ、明日への見通しを持てるようにした。

じゃがいも洗い

その次の日、前日の予告もあって、朝来て早々に「じゃがいも洗いたい」と言い出してくれる人がいて、桜の木の下にバケツ、たらいなどを集めてきて、その中でじゃがいもを洗い出した。年少組、年中組の何人かも先生と一緒にいたり、自分たちだけで手伝いに来てくれた。今年のじゃがいは表面におできのようなのがたくさんあるものもあって、洗っても洗ってもつるつるにならない悪条件だったこともあって、かなり長い時間、年長中少入り交じって、じゃがいも洗いに取り組んだ。年少さんでも、しっかりと意識を持って、そのおできのようなどころをつめを立てて一生懸

命とろうとしている人もいた。

T子（年長）とM子（年少）の二人は、洗いあがったおいもを集める役を買って出てくれた。

A夫はどちらかというと、何事に対しても取り組みがあっさりしているところがあって、もう少し突っ込んだ取り組みをしてほしいという思いを担任としては抱いていた。じゃがいも洗いをしている人たちのそばの園庭で暇そうにしていたA夫に、「Aちゃんも手伝って」というと、A夫はすぐにやり始めてくれた。三、四個やってくれたのだろうか、すつとその場を離れて行ってしまった。

出来るだけ多くの子どもたちに無理のない形で関わってもらいたいというこちらの思いがあり、他のことをしている子どもたちの遊びの様子を見にいきながら、「もつとおいもを洗わなくてはいけないの。手伝ってくれないかな」などと声をか



けて回って見た。その中にA夫がいて声をかけると、「も、ぼくは四つもやったよ」という返事であった。そこで引き下がらずに「Aちゃんの力がどうしても必要なの」と言って頼むと、人のいい

A夫は「分かった」といって再び取り組んでくれた。そのうち、A夫はそのおできのようなものの効率的な取り方を自分で工夫して見つけ出した。それはバケツの縁で「ししし」という方法であった。人に言われて消極的にやっていた状態から、自らのやり方を見つけ出したことで、A夫の取り組み方がそれまでと全く変わってきた。他のメンバーが次第に抜けていった後でも一人残って、夢中になってやり続けた。残りのじゃがいもは少し痛んでいて避けて置いたものだけになっていて、年中の人から「それは悪いのだから、やらないの」と言われても、A夫はそれを放そうとはしなかった。そこで、痛んでいる部分を私が取って

あげてからA夫に渡すと、うれしそうにそれもきれいにしてくれた。そうして、最後の一個がなくなるまでA夫は、やり続けて、やり終えた時ほども満足そうな顔をしていた。

茹で上がったおいもを、お帰りの前に年中、年少の各部屋に四グループに分かれて届けてじゃがいもを配ったり、お茶を配ったりということにも取り組んだ。この後、年長二クラスで、遊戯室でお弁当を食べ、その際自分たちも茹でたおいもを味わった。

お土産のじゃがいもの袋詰め

幼稚園のみんなでじゃがいもを食べても、更にかんりの量残っていたので、当日お留守番であった年少さんの家にお土産としていくつかじゃがいもを持って帰ってもらうことになった。次の日、今度はこちらが、大、中、小に分けて置いた中か



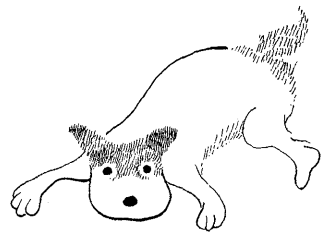
ら、大一、中二、小二を取ってそれを袋詰めすることにし、子どもたちと一緒に取り組んだ。子どもたちに声をかけると、女児を中心に七、八人が集まって手際よくわずかの間に年少児の人数分のお土産袋が出来上がった。

一連のじゃがいもにまつわる取り組みは、数日間にはわたって、幼稚園のごく普通の生活の中で展開された。じゃがいもを掘りながら「先の見通し」を伝え、「明日洗って食べる」ということ頭に置きながら大きさの選別に取り組み、その目に映る具体的な活動を通して年少、年中の子どもたちの中にも「明日への期待」を醸成し、次の日ゆるやかな時間の流れの中で三々五々おいを洗うことに年少、年中、年長入り交じって取り組み、そして茹で上がったおいを食べる体験をする、といった具合に、そのプロセスを丁寧に来るだけ自然な形で生活の中に組み込んでいった。そう

することで、こちらの意図を生活に盛りこみながらも生活の自然なゆるやかな流れに委ね、その中で子どもたちがこちらの意図した取り組みに関心を抱いて自分から関わってくる機会が自然な形で生まれてくるようになったと思う。

子どもたちの生活の中に、こちらが意図する取り組みをゆるやかな時間枠の中で細かくプロセスを踏みながら盛り込んでいくことで、こちらの意図性と子どもたちの主体性が重なり合って、自然の流れの中で子どもたちの体験の幅、世界を広げていくことができるのだと思う。

A夫は、「おいを洗うという活動」に初めの





うちは消極的な取り組みをしていたが、保育者の後押しもあり、再度取り組み中で、自分なりの発見をし、自分を深く関わらせながら取り組んで行くように変っていった。「おいを洗うという活動」が、自分なりの発見を機に、自己を深く関与させていく活動に質を転じ、Aにとってより深い意味を持つことになっていった。

ただ「流れに沿う行動がとれる」という表面的な捉えではなく、連続する生活の流れの中で細かいプロセスを丁寧に作りながら、子どもたちが選び取っていく活動の幅を広げ、その活動に子どもたちが主体的に取り組んでいくようにして、自己を深く関与させたもの、自分にとってより意味ある活動に活動の質を高めていけるようにしていくことが大事なのであろう。こちらが無理強いしても、活動の質は高まっていかない。自分自身で選び取って、試行錯誤していく過程の中で、活動の

質、意味が変ってくるのだと思う。活動の幅を広げていくということで、Aの事例のように、保育者の後押しが必要になってくる場合もあろうが、そこでその活動を選び取っていく、その活動にどういう関わり方をするかは、個々の子どもが決めていくことであらう。

全体の流れを作るような活動を子どもたちと一緒に進める場合、「全体の流れをどう作るか」「全体の流れに子どもたちが乗っているか」といった全体的な視点だけではなく、個々の子どもを取り組みを細かく見ていく視点を忘れずにいたいと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)